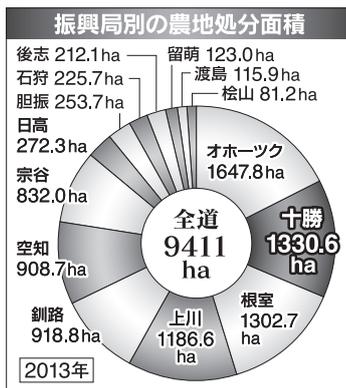


道農政部は、2013年に離農した農家の保有農地の権利移動状況をまとめた。十勝の離農戸数は前年比19戸減の70戸で、全道14振興局で前年より減ったのは十勝と空知のみ。売却や貸し出した処分面積は同392.1ヘクタール少ない1330.6ヘクタールと、全道で2番目に多かった。

団塊リタイアで微増 全道824戸



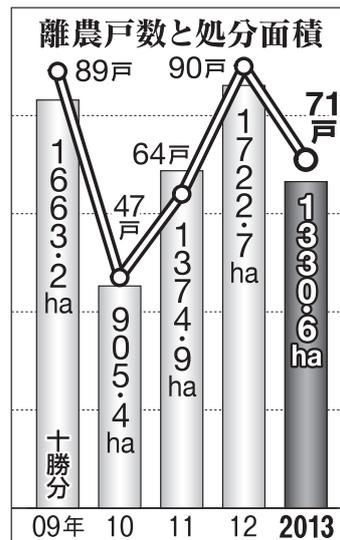
調査は1970年以降、離農に伴う農地の権利移動の実態を把握するために毎年行い、農地集積や農地流動化施策に生かしている。

全道の離農戸数は前年より78戸増えて824戸。離農農家が年内に処分した農地面積は同881ヘクタール増の9411ヘクタールだった。

離農戸数はここ20年ほどは徐々に減っていたが、団塊世代の高齢化などで近年再び微増傾向にある。

十勝 処分面積は道内2位

地区別の離農戸数では水田地帯の上川が222戸と全道で最も多く、次いで空知の165戸、オホーツクの91戸、十勝71戸と続く。農地処分面積は、オホーツクが1647.8ヘクタールで最も多く、次いで十勝の1330.6ヘクタール、根室の1302.7ヘクタール。1戸当たりの経営面積が多い畑作・酪農地帯が多い傾向となっている。



十勝の離農戸数71戸の内訳は、畑作53戸、酪農14戸、畜産4戸となっている。年齢別では60歳以上が52戸、うち65歳以上が38戸、平均年齢は66.5歳。離農の理由では、後継者不足が全体の半数以上の37戸、労働力不足が13戸、負債・経営不振が10戸だった。

十勝の農地処分面積1330ヘクタール中、認定農業者に処分されたのが1064ヘクタール。

うち7割以上が個人農家に貸し出し、売却され、25.5%に当たる272ヘクタールを農業生産法人が引き受けた。

処分時の権利の種類別では、60%に当たる803ヘクタールが賃借、39%に当たる514ヘクタールが所有権の移転（売却）となっており、十勝総合振興局によると「理由は分からないが、例年に比べ売買が多くなっている」（農務課）。

十勝農協連（山本勝博会長）は「2014年十勝畜産統計」（12月現在）をまとめた。経産牛頭数が前年比1.1%（1374頭）増の12万4340頭と2年ぶりに増加し、生乳生産維持につながった。酪農、肉牛とも中小農家の離農を大型化でカバーする傾向が鮮明になっている。個体販売の市場価格は乳用、肉用とも前年を大幅に上回る高値で取引され、特に和牛素（もと）牛は過去最高水準となっている。

■乳用牛 戸数は2.9%減 乳量は0.5%増

乳用牛は飼育戸数が2.9%（43戸）減の1440戸。生乳出荷戸数は3.2%（43戸）減の1291戸だった。

搾乳中止農家は前年より11戸減って44戸。うち経営転換が22戸、離農が22戸。経営転換では「耕種」が11戸で

最も多かった。離農の理由は後継者不在が11戸で最多だった。規模別では年間乳量300トン以下が32戸と多くを占めた。

乳牛飼育頭数は2%（4391頭）増の22万4335頭。育成牛は3.1%（3017頭）増の9万9995頭で、経産牛の増加と合わせて離農が進む中でも、規模拡大で生産が補われてい